

連続講座

畜産経営の決算(2)

・・・もうかる畜産のために・・・

田 中 文 哉

畜産部門の総括を、経営経済の面からするには大体収入と支出のバランスが先ず第一の問題となるが、大切なことは、収入と支出の相関関係、つまりどのような関係があるかを知ることである。

ここに「収益、費用および純収益函数」と題した表がある。この表をよくよく見ていただきたい。この表から貴方は何を読み取ることができますか？

総生産物の最大をねらったとしよう。そうするとその最大値は第8、9の投入を行った段階である。なる程、純収益は最大であるがはたして「もうけ」が最大であろうか。仮に、総費用が単価5ドルとすると、第8、9の段階は純収益は32.27で必ずしも高くない。農業経営で「もうけ」を多く得るためには、総生産物が多いことではない。純収益の多いことである。

この立場からすると単価5ドルの場合はむしろ生産をひかえめにして第6段階の場合が一番純収益を多くあげることになる。こんな簡単な理論がいままで、農家の皆さんにわからなかったとはいえまいが、多く穫って「損」をする農業はこんな理論がわからなかったことに起因するといつてよい。

ところで、費用の単価が10ドルに上昇したつまり、購入物価高になったら、貴方はどうしますか。この表によって正しい答えを出して下さい。

ここに示した純収益函数の理論は、数字をつかま

なければ正確につかむことはできません。多くの方は、肥料や農薬が高くなったから、もっと労働を多投しても、総収入を多くあげなければと、購入物価に正比例した収入を予期して農業をすすめられたと思いますが、もしもこの投入量による総生産の函数関係を前提とすると、価格が安いから多量生産をとという考え方はどうかと思います。この点ここに示した表によってトクト理解しなければなりません。

畜産における飼料給与の経済性をどう考えるか？これは皆さん御存じのFM率、つまり乳価の高低に従って購入飼料の在り方を加減することが原則となっています。試みにある1日F（購入飼料）を見積ってみて下さい。その見積額のM（乳価）に対する比が30%以下の場合を購入飼料の適正な給与量としていますが、考えてみるとおかしな話で、飼料の構成は、自給と購入、粗と濃厚及び栄養分といくつかの原則的組合せをもっています。従って、FM率のみが酪農経営の成果をみるバロメーターにはなりません。少なくとも購入飼料+自給飼料、つまり給与飼料総量とその価値換算額と乳価との関係でみる必要があります。

自給飼料は給与飼料の70%を目標にしているからよいではないかと反論されるでしょうが、購入飼料を乳価に対して比較するのなら自給飼料も同じく乳価に対して比較するべきではないでしょうか。従って前述のように、購入、自給の合計価値換算額を乳価の上、下に依じて栄養的には完全に給与することが、酪農経営の勘どころとなるわけです。本年の給与飼料の一定期間を、このような考え方で試算比較してみてください。

ところで、酪農経営を主に考えてみても他の商店経営の場合も大きな差違はありませんが、畜産経営の他部門経営との相違点は、投入する費用の性質が大きく異なっている点です。費用を分けて、固定費

収益・費用および純収益函数

投入 (X1)	総生産物 (Y1)	P _{Y1} =2ドル			P _{X1} =5ドル		P _{X2} =10ドル	
		総収益	平均生産物価値	限界生産物価値	総費用	純収益	総費用	純収益
0	0	0	—	10	0	0	0	0
1	5	10	10	18	5	5	10	0
2	14	28	14	14	10	18	20	8
3	21	42	14	10	15	27	30	12
4	26	52	13	8	20	32	40	12
5	30	60	12	6	25	35	50	10
6	33	66	11	4	30	36	60	6
7	35	70	10	2	35	35	70	0
8	36	72	9	0	40	32	80	-8
9	36	72	8	2	45	27	90	-18
10	35	70	7		50	20	100	-30

(不変費) と可変費 (変動費) とに二分し、固定費部分が多くかかるために経営収支の赤字が出る場合が非常に多いことです。この問題の解析は、次の「損益分岐点」の理論で明らかにしてみましょう。

・・・損益分岐点理論の摘要・・・

最近いわれていることは、どうも畜産のもうけが薄いということである。もっと乳価が上らなければ、飼料費がかさんで、酪農はもうからないとさえいう人がある。

考えてみると、何事もそうで、そう簡単にもうかるものではない。もうけるためにはそれ相当の技術的、経営的合理性が貫かれていなければならない。

酪農経営の収益性が問題となるのは、乳価に対する飼料費の割り高の問題もあるが、本質的には、飼料費の問題よりも費用全体の問題である。

経営的に、費用を分けて、固定費と、変動費とし、その二つがどのような結合関係で、ものを生産する場合が一番収益性が高いか。

を要する性質をもっているものをいう。

酪農に例をとると、乳を多く出そうとすると飼料を多くやらねばならない。飼料の給与量と乳の量は大体比例的に変動する。従ってこのような費用を変動費と名づけるのである。

A図によるとSの収入をあげるためT1とT2の二つの変動費の投入方式がある場合、T1よりT2の方が利益が多いこととなる。これを数字で読むとS = 12 万円の粗収入を表わしている。このときT1 の場合は費用を8万円投入したので利益が4万円となったが、T2 の場合は6万円を得たことを表わしている。

ここで注意したいことは、変動費の性格である。変動費はこのように、粗収入の大小に対して、比例的 (完全な正比例ではないが) に変動するので、このような変動費のみで物を生産する場合は先ず先ず損失は招かない。

B図をみてみよう。Bの場合はSの雑収入をあげるため、固定費の2万円と変動費の6万円を要した場合である。A図と同じく、差引きの利益は4万円で同じであるが、Aの場合は生産の初めからわずかながら利益があがり、生産を増すごとに利益は大きくなるが、Bの場合、収入が4万円のときには、固定費2万円、変動費2万円、合計4万円で差引き0となる。この点を損益分岐点といっている。つまりこの点に達するまでは損失があるが、この点を過ぎると利益が生れる。

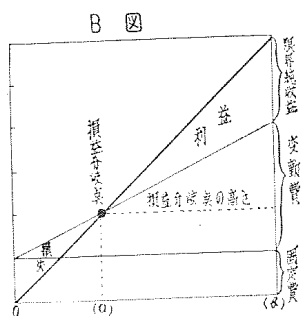
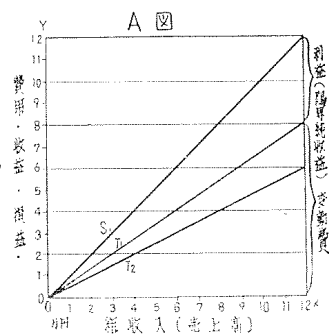
このようにして固定費と変動費の同時投入によって、生産物が生産されるが、費用の投入を誤ると生産が少なく損失を招くに至る。そこで、この二種の性格をもつ費用をどのように投入して、より多い生産をあげるかの問題が解明されなければ労多くして功少なしの結果をまねく。とくに酪農や養鶏、養豚のように、畜産はとかく固定費が多くかかる場合が多い、稲のように固定費が少なく変動費の多くかかるものはどのようなやり方をしても、損失を招くような場合は少ないが、酪農などがどうももうけが薄いというのは結局この関係の理解が足りないことから起る場合が多いことに注意しなければならない。

この問題に答える一つの解答が、損益分岐点の原理である。

A図を説明しよう。Oを原点として、OY軸に費用、収益、損益を表わし、OX軸に雑収入 (売上高) を表わすこととし、相互の目盛りを同一にとる。

Oから対角線を引く、この対角線Sは雑収入を表わす。この雑収入をあげるために必要な費用をT1、T2とする。

このT1、T2はいずれも変動費とする。変動費は雑収入をあげるために必要な比例的な費用である。例えば肥料費や、飼料費のように、生産量つまり収入をあげようとすればその収入に比例して多く



費用は雑収入をあげるために必要な比例的な費用である。例えば肥料費や、飼料費のように、生産量つまり収入をあげようとすればその収入に比例して多く